

マルクスにおける個体 *Individuum* と個別者 *Einzelne*
——社会思想史的な系譜——
竹内 真澄（桃山学院大学）

私的な話になるが、私はおよそ40年前『ヘーゲル国法論批判』1843年の研究から出発した。そのとき、私人と公民の分裂という近代の事態を理解することが重要であることを理解したが、この私人という概念がどこから来たのかは知らなかった。

その後、西洋思想史の古典を読んでいてソクラテスの文章の中に私人という言葉があることに気づいた。アリストテレスにもあり、下って、トマス・アクィナスにもあることがわかってきた。しかし、古代や中世に使用された私人概念は、本来は公的なものを志向すべきなのに私利私欲に向っているダメな人間という意味であった。

その使用法が一変するのは、Th・ホブズンの『リヴァイアサン』においてである。めったに注目されることはないが、しかし、決定的に重要だと私には思われる文章がある。そこでホブズンはこう論じていた。「<著作者たちがたたえる自由は、主権者たちの自由であって、私人たち *private men* のそれではない>古代のギリシア人やローマ人の歴史や哲学において、また、かれらから政治学に関するすべての知識をえた人びとの、著作や議論において、あんなにしばしば、かつ、たたえられて、のべられている自由は、個別者たち *particular men* の自由ではなく、コモンウェルスの自由なのである。」これは、目から鱗が落ちるような鮮明さで私を驚かせた。これは、差別されてきた私人を堂々と肯定するホブズンの輝かしい「私人宣言」なのであった。

こうして私人を追跡すると、ロック、スミス、ルソーにおいて私人概念が継承されており、ヘーゲルがイェナ期（1801-1807）にそれをいわば弁証法的に扱うに至ったことが判明した。このことをふまえて『資本論』の「資本蓄積の歴史的傾向」の箇所を読むと、私人概念が所有論的に再定義されており、いわゆる個体的所有の再建テーゼは、従来の研究よりもずっと奥が深く、個体と個別者（私人）を区別し、かつまた、資本の生産過程で労働を社会化する過程が個体と個別者の区別と連関において把握されていることがわかってきた。これは、マルクスによる近代西洋思想全体への批判の要点になっており、かつまたヘーゲルの個体と個別者の区分を批判的に継承したものであった。

現代は新自由主義の時代である。これは私人論の見地から定義すると人間の一切の質的区別を捨象し、私人へ還元する思想である。そこで個体は私人（個別者）と同一視されてしまう。これにたいする現代批判をおこなうためには、まずは私人論を再構成し、個体と個別者を区分する作業をやりぬかねばならぬ。おそらくここにマルクスを現代的に読む一つの基礎があると思われる。およそこういう内容を皆さんとともに考えてみたい。